徐隆泰著
北村彰秀訳

満洲語翻訳論――字法挙一歌

第２版

2023 年 4 月２９日発行
Thrusteppes
©Akihide Kitamura 2023

（各行の字数は 36 字を推奨。それより少ないと行間訳がずれてくることがある。）

目次

はじめに
字法挙一歌の翻訳論の試訳
　序
　本文
　（あとがき）
字法挙一歌の翻訳論のナイダとの比較
おわりに
【参考文献】

はじめに

清朝においては、中国語から満洲語へ、満洲語から中国語へ、またその他（たとえば満洲語からモンゴル語へ等）、翻訳の働きが活発に行われた。そのような中で、翻訳論も書かれた。吴雪娟（日本語読みはごせつえん、あるいはごせつけん）（2006）は満洲語翻訳論についてまとめ、どのような翻訳論が書かれたかを述べている。吴氏はまず繙清説（翻清説）について触れているが、これは短いものであり、また既によく知られているため、今回ここでは取り上げない。次に吴氏は字法挙一歌という文献中の翻訳論について記しているが、これは今までほとんど知られていなかったものであり（馬祖毅の中国翻訳通史にも出てこない）、また吴氏もかなりのスペースを割いているため、これを日本語に訳し、興味ある方々、必要とされる方々の用に供することとしたい。（吴氏はそれ以外の翻訳論につい

ては触れていないが、それ以外にもあることは念のため記しておきたい。)(なお、学問的な文献では、満州語、満州民族ではなく、満洲語、満洲民族と表記することになっているため、ここでもそのような表記を用いることにした。)

字法挙一歌とは満洲語翻訳者および満洲語学習者のために、清朝時代、中国語で書かれたものであり、1885 年に世に出ている。著者は金州の徐隆泰(字は沃田)という人物である。出版に至るまでに著者以外に 10 人の人物がかかわっているが、責任編集者は寿栄（字は耀庭）と見てよいであろう。寿栄は著者の原稿を 30 年以上そのままにしていたとあり、また、原稿の整理から印刷、出版までも多少時間がかかったと思われるため、原稿のできたのをごく大まかに、出版年の 35 年前とすれば、1850 年ということになる。つまり、書かれている内容は 1850 年ごろのものである。しかし、文体については、最後の段階で手を加えることもありうるため、この著書の中国語の年代は 1845～1885 年としておくべきであろう。内容は、全体の 4 分の 3 ほどは満洲語の文法や語法の解説であり、残りの 4 分の１ほどが、満洲語翻訳論となっている。そのようなことから、満洲語からの引用を多く含む。

最近、この文献の満洲語部分にも中国語訳を付けて、嵩洛峰編（2018）という文献が出た。それにより研究者には多大の便宜が与えられることとなった。その文献の p .185 を見ると、吴雪娟（2005）以外にはこの書を取り上げた研究はほとんどないとのことである。(そこには年号が 2015 年となっているが、これは 2005 年の誤りである。）なお、吴雪娟（2006）の満洲語翻訳論の資料紹介の部分は吴雪娟（2005）と内容はほとんど同じである。いずれも、字法挙一歌の翻訳論の部分をそのまま紹介したものである。また、嵩洛峰編（2018）の出版以後、字法挙一歌についての論考が出ているかと思い、中国の学術誌「満語研究」の 2019 年の１，２号、2020 年の１，２号、2021 年の１，２号を見てみたが、字法挙一歌をとりあげた論考は出ていない。ということで、まだほとんど研究はなされていないようである。ただし、この文献の朝鮮語訳が出ていることは述べておきたい。（私の手元にはないが、金裕範（他）『満洲語文法書資料集成』満洲学叢書第 11 巻、2019 という文献が出ている。）

字法挙一歌の原文を見るためには、上記の嵩洛峰編（2018）が便利であるが、すぐに原文のマイクロフィルム版を見たい場合には、国会図書館の検索機能が無料で利用できる。利用方法は、まず国会図書館のサイトを開き、そこから検索機能のところへ進む。次に書名のところに「字法挙一歌」と入れ、図書館外も検索できる設定にして、検索をかける。そうして、次の画面の World Cat とあるところをクリックする。そうすると、「ダウンロード可能な記録資料」というものがいくつか出て来るので、そのうちの 1 つをクリックする。そして、次の画面で、「オンラインで入手 View online というところをクリックする。そうすると字法挙一

歌の原本のマイクロフィルム版が出て来る。（多少違った手順でも可能と思う。）プリントアウトも可能であると思う。

字法挙一歌はまず「序」から始まる。その部分を読むと、この書は、満洲語の文法書であるが、執筆者の意図というところから見ると、満洲語の文法書として書かれ、翻訳理論や翻訳方法を付加したものではなく、最初から、翻訳の手引き、あるいは翻訳の指導書として書かれたということがわかる。また、編者寿栄がこの書を高く評価していたことがわかる。

序のあとには本文が続くが、本文は 300 近くの小区分に分けられ、各区分はまず、漢文の韻文（７音節×1、×２，×３、×４のいずれか）でその区分の要点を述べ、次に必要とあれば漢文の散文で追加説明をし（ここでは散文部分は［　］の中に入れて示した)、それから満洲語の例文を挙げ、最後に例文の中国語訳（中国語から満洲語に訳されたものの場合はその中国語原文）を挙げている。なお、この順序はいつも同じではなく、例文の途中に語句の説明が中国語で出てくることもあり（その説明はおそらく、満洲語と中国語の表現方法の違いを埋め合わせようとする意図から入れたものと思われ、われわれにはくどい、あるいはわかりにくいと思われるものもあるが、そのまま記すことにした)、また、満洲語の例文はないこともある。満洲語の単語ごとの逐語訳は原文にはないのであるが、嵩洛峰編（2018）では本文理解の助けとするために付けているため、ここでも付けることにした。ただし嵩洛峰編（2018）では逐語訳は中国語であるが、ここでは日本語で逐語訳を付けた。この逐語訳は中国語訳から訳したものではなく、原文から訳したものである。（ただし、中国語訳を参考にしたところはある。）なお、各区分の番号は嵩洛峰編（2018）にはあるが、原文にはない。これは便利であるため、嵩洛峰編（2018）のものをそのまま使わせていただいた。また、(　）内の説明は私が加えたものである。また、下線も、本文にはないが、説明の便宜上必要な場合、私が加えた。

なお、満文漢訳、漢文満訳の例文については、私の著書（満洲語翻訳論－－字法挙一歌中の翻訳論の全訳）の初版では、漢文の例文は付けず、その日本語訳のみを付けていた。しかし、漢文の例文があったほうがわかりやすいのではないかとのご指摘があった。まさにそのとおりである。嵩洛峰の著、あるいは字法挙一歌の原文が手元にないかぎり、理解の困難なところがある。そこで第２版では、ポイントとなるところ、どうしても必要と思われるところについては、漢文の原文を赤字で入れた。これによりかなりわかりやすくなったことと思う。これで、原文が手元になくとも、この翻訳論の大筋は理解できることと思う。

今回の版では、挙一歌の序文とあとがきの日本語訳を加えた。これにより、この書の執筆事情が見えてくると思う。また、この翻訳論をナイダのものと比較してみた。また、題名を少し変えたため、第３版とはしなかった。

なお、この翻訳論が漢文満訳の翻訳論であるか、満文漢訳の翻訳論であるのかをここで明らかにしておかなければならない。それはどちらの翻訳を扱うかによって、この文献の性格自体が異なってくる可能性があるからである。本書の記述方法をみると、まず満洲語で例文が出てきて、次にその漢訳と思われるものが出てくる。これを見ると、この翻訳論は満文漢訳の翻訳論のようであり、［262］の記述もそれを裏付けているようである。しかし、［248］では論語の満洲語訳が原文とともに出てくる。論語の満洲語訳をさらに漢文に直す必要はほとんどないと思われる。当時の状況を考えてみても、満文漢訳よりも漢文を満洲語に訳す仕事のほうがはるかに多くの量があったものと思われる。（もともと満洲語で書かれた文献は漢文の文献に比べてはるかに量が少ないため、満文漢訳の仕事はあまり多くはなかったと思われる。）そのため、本書の翻訳論は主に満洲語漢訳を念頭において書かれたものであるが、漢文満訳も考慮に入れて書かれたものであると思われる。

この翻訳論は難解なところもある。大まかな内容の把握は難しくはないのであるが、いざ本文にあたって読み進めようとすると、細かい内容の理解は決して容易ではない。その第一の理由は、かなりの部分が韻文で書かれていること。第二の理由は、当時の満洲語関係者が用いていた専門用語が出てくること。第三に、中国語特有の簡潔表現があること。第四に、中国の古典、歴史、文化についての知識が必要とされるところがあること等があげられる。しかし、とにかく、まず、たたき台として、訳文を作ってみることを試みた。これにより、この文献がどのようなものであるか、概要をつかむことができるであろう。

ここで、本文理解のため、満洲語はどのような言語であるか、簡単に述べておきたい。

満洲語は日本語によく似た文法を持つ言語であり、語順は日本語とほとんど同じである。名詞に格助詞（てにをは）がついて、格を示す。また、動詞の語幹に語尾がついて終止形、命令形、連体形、連用形、仮定形を形成する。また、日本語の副助詞や終助詞のようなものが満洲語にも存在する。

なお、訳文にはわかりにくいところも多く、それらは私の語学力や翻訳能力の不足によるところもあるであろうが、既に述べたとおり、原文自体にわかりにくいところがあることも記しておきたい。原文のみならず、中国語のネイティブスピーカーであり、満洲語にも堪能と思われる吴雪娟の説明自体もわかりにくいところがある。吴氏も解読に苦労したのかもしれない。

字法挙一歌の翻訳論の試訳

以下、字法挙一歌の翻訳論の部分の試訳を挙げてみる。なお、満洲語のラテン文字表記は嵩洛峰他編（2018）と大差ないのであるが、版権侵害とならぬよう、

できるだけ独自性を出すようにした。

【試訳】

序

八股（はっこ）文（文体の一種）はわが栄家が代々継いできた技である。私は山右の舞勺で、時にまかせてこれを研究し、習った。間もなく家の貴人（？）が館を捨てたので、そのため家の仕事が非常に困難になり、今までの仕事が荒れすたれ、そこで中国語をやめて満洲語を学び、金州の徐沃（よく）田先生の門下生となり、授業を受けた。先生は生まれつき孤独で気骨があり、流行に合わせるということがなく、下級役人にも甘んじて従い、いつも大量の書物の中に埋もれ、翻訳入門が容易ではないため、かつて「挙一歌」という書を著し、語句の用い方の法則を作り出し、窓のもとで教え、読み、得るところが大であった。私が入門したときにはすぐにこの歌を授けて曰く、「翻訳を学ぶ者は必ず『四書』『聖諭広訓』を入手して、それにより大きな法の二書を共に備える。そこで私はこの歌を注釈し、もっぱらこの二書を証となし、本当にこれに熟達することができるようにし、翻訳の高殿に登ることができるようになり、口頭の問答の言葉もまたその中にまとめたのだ。」私はこれと取り組むこと既に久しく、その通りであると深く信じ、それがこのように苦心の作であるにもかかわらず窓の下にうずもれていることをひそかに惜しみ、そのため版木に彫って印刷することを願ったが、先生はそれができなかった。後に私は再び昔の仕事にもどり、自らできること、思うところを自覚し、八股（はっこ）文の趣を詳しく論述し、示し、「挙一歌」の語法の力を深く得たのである。すなわちこの歌の作品は満洲語において有益であるのみならず、漢文においても有益である。後にこの書のすべてを承蔭（字は佩先）に与えて読ませ、彼はまた私と同志であるため、出版することを強く願った。

先生は既に連絡が取れない。原稿を互いに渡し、かつ慶泰（字は体元）がいて、2 人の子錫祉（字は子如）と錫祐（字は贊延）を率い、先生の次の子季中（字は蔭汀）が清書の役を担った。

目次

……（省略）

金州の隆泰沃田徐氏の著（隆泰は名、沃田は字、徐は姓）

授業を受けたモンゴル人寿栄、字は耀庭が比較して正し、長白（地名？）の承蔭、字は佩先が比較して刊行した。

「清文字法挙一歌」は一つの事柄から類推して他を理解し、百を悟ることができる。翻訳の非常に深いところまで入ることができ、利益は大であり、無駄を省き、初学者を利するものである。（この段落は韻文になっている。）

［歌は約 3000 ほどの趣深い字からなり、韻を合わせて口で唱えると、時ととも

になじんできて、読みかつ理解し、年を経ずしてはっきりわかってくる。]

本文

［１］～［217］（文法説明のため省略。）

［218］満洲語は語形変化が多いわけではない。表題（目次の部分に翻訳法概説とある）は定まった規格がないことに由来している。（翻訳にはこうすべきであるという規則がない。）弱視者が明るさという杖に頼るのに似ている。自分の選択をある時は避け、ある時は採用しなければならない。

［年長者は言う。翻訳が漢文に従うことは、ちょうど弱視者が明るさという杖に従うようなものである。このたとえはよく言い当てている。ちょうど道がまっすぐであったり、曲がりくねったりしているようなものである。道には泥水の穴があり、もともと固定した板などはない。盲人は見るところがない。そして落ち着いている者はここを進んでいく。危険に遭っている者や危険を避けようとする者はもっぱら杖の明かりに頼り、よく調べる。翻訳の道はこのようなものである。漢文は多種であり、満文もまた多種である。すなわち漢文には定まった決まりがあるが、定まった形式というものがない。満文には定まった規則があるが、定まった見方はない。]

（翻訳に唯一の正解はない。）

［219］細かい文はまず大ざっぱな文に直して、その大ざっぱなものから再び口頭で言ってみて、段落がなめらかでなければそれには従わず、口から出るままにおおまかなことを再びかみしめる。也（なり）、之（これ、の）、乎（か？）、矣（のだ）が出てくるたびに、呢、呀、咧、罷、麼（以上の口語的言い方）としておけばよい。語の息吹は自ら出て、把握することができる。内容を知るにはこれ以外のことは不要である。

［吾輩がふだん読むところの書は、すなわちその日、聖賢者が説くところのことばだ。話をするときには相手も自分と同じような立場だ。本になってしまったあとでは、聞くことはできない。書物の「なり、けり、べけんや」という文語調の表現は、すなわち当時の（口語の）呢、呀、咧、吧だろうか。もしも当時、微生高が正直者だという評判なら、ある日、人が来て酢を求めるなら、「それはない。」と彼が言うことはない。近所の家へ回ってきて、聞いてきたとき、彼は他の人のものを持っていて、彼は行って機嫌をとる（論語に出てくる話）。正直者だということがどうやってわかるのか。そこで先生は言う。「微生高が正直者だとだれが言うのか。ある人が酢を求めた。彼は隣人のところから探してきた。」文章ではこのように書く。「微生高が正直者だと誰が言うのか。ある人が酢を求めている。となり近所の人たちに尋ねて、これを与える。」（この部分文章語）また「諸侯でなくて何」とあるのは、満洲語に訳せば、goloi beise waka oci ai となり、それは「諸侯でなくて何」という意味である。そして、「国でなくて何」というのは満洲語に

訳せば gurun waka oci ai となり、それは「国でなくて何」という意味である。また、「追い払った豚を捕まえておりに入れ、縛り上げた。」というのは満洲語では turibuhe ulgiyan be gajifi（この語は昊雪娟の引用では kūfi となっている。すなわち、字法挙一歌は複数が残っていて、それらの間に異同がある）horho de hoiha bime, geli huthure adali kai となり、「追い払った豚を捕まえておりに入れ、縛り上げた。」という意味である。学者はその時の書物の字句にあたって、その日の表情のように、自然に奥深く隠れたところがなければ、翻訳が困難であることはない。もし段落がはっきりしなければ、筋がはっきりしなくなり、再び文を読み、再びあらすじをとらえ、再び口で唱え、それにより脈絡が出てくる。改題とはこういうことであり、他の方法があるわけではない。]

（まず原文の意味をきちっと把握しなければならない。）（微生高は借り物を自分のものと言っているので論語では非難されている。微生高の話は単なる文章語の例としてあげたものか、あるいは翻訳方法をしっかり把握し、自分のものとせよという意味もあるのか不明である。また、豚についての文は、意味をしっかりとらえよとの意味もあるのか。）

［220］翻訳方法はまず変則的な方法から学ぶことだ。言葉を加えたり減らしたりして、意味をとり（意訳し）、倒置する、文を飾る、意味をもっと明らかに出す。正統的方法の中にもいつもいろいろな変化がある。本当の意味の表現方法も、いろいろなバリエーションがある。

［文章翻訳方法は多いのではあるが、ここであげる正統的方法、変則的方法の 2 つの外に出てはならない。もしあげている考えが自然であり、正確に本当の意味を推測できるなら、逐語的に訳すとすなわち意味がはっきりするのが正統的方法である。もし冗長な語句があればそれを削る。足りないところは補う。文の意味がはっきりせず、表現が変則的な場合は、あるいは意味をとって訳し、あるいは倒置する。これが変則的方法である。しかし本当の意味がコンテキストから分別可能になっているなら、それもまた変則的方法である。正統的な方法の中にしばしば変則的方法を含ませる。

［221］本来の意味ははっきりさせることが必要である。「曰（いわ）く」の訳は hendume（…の曰く）だけではない。

you han-i　hese ［旨である］

堯　王　の　勅旨

堯曰く。

u wang ni　hese ［旨である］

武　王　の　勅旨

武王曰く。

dosi-fi　fonji-me ［問う］, be i, ʃu ci　antaka niyalma.

入って　問うには　　伯夷　叙斉　どんな　人
入って曰く、「伯夷叙斉はいかなる人か。」
kungzi jabu-me［答える］, dorolon be sa-mbi.
孔子　答えるには　　礼　を　知る
孔子曰く、「礼を知れ。」
fuzi henduhe-ngge ［引用］
孔子　言ったには
子曰く
doro　yabu-ra-kuu　　o-ho　ni-kai se-he-bi ［経典］
道　行かなければいいが　できた　か　というのだ
その道を行くのではないよ。
gung　si　huuwa hendu-me,
公　西　革　言うには
公西革曰く
iu donji-me　uthai　yabu-mbi-u se-me　fonji-ha de?
由　聞いて曰くすなわち　行くのか　言うには聞いたか
由はまた問う。行ったと聞いたのか。
fuzi ama ahuun bi-kai se-he［述べたとき］
孔子　父　兄　いて　と言った。
子曰く、「父と兄がいる。」
kiu donji-me　uthai　yabu-mbi-u　se-me　fonji-ha de?
求　聞いて曰くすなわち　行くのか　言うには　聞いたか
求はまた問う。行ったと聞いたのか。
fuzi　donji-me　uthai　yabu　se-he［曰く］
孔子　聞いて曰くすなわち行け　と言った。
子曰く「行けと聞いた。」
ini　gisun　ete-ra-kuu　be ete-re adali　tuwa-mbi.
彼の言葉は　勝たないの　を　勝つ　と同じに　見る
曰く「勝たないのも勝つのも同じようなものだ。」
［文の終わりは sehebi（と言った）と同意。］
（会話の内容、思ったこと、考えたことの内容の表現は言語によって異なる。上の例を見ても、中国語の「曰く」に対応する満洲語は単一ではないことがわかる。）
［222］「兄弟」はその地位によって違った言い方がなされる。
lu gurun wei gurun-i dasan, yala ahuun deu ［同姓諸侯］kai.
魯　国　衛　国　の　政治　本当に　兄弟　である
兄弟

魯・衛の国の政治は兄弟のようなものだ。

mi zi-i sargan, zi lu-i sargan, eyun non［姉妹］ o-mbi.

弥子の　妻　　子路の　妻　　姉妹　　である

兄弟

弥子の妻と子路の妻は姉妹である。

［223］「先生（さん）」という言葉は相手が誰かを見て使い分けられる。

ungga［年長者］ sa-de ulebu-mbi.

年長者　　たちに　接待する

先生

年長者をもてなす。

sefu［師］, ai turgun-de ere gisun tuci-mbi?

教師　　何の 事情 で この言葉　出る

先生は何のためにこの言葉を言ったのか。

acu［普通の表現］ absi gene-mbi?

あなた（敬称）　どこに行くのですか

先生將何之？

どちらにいらっしゃるのですか？

ming dou siyan ʃeng.

明　道　先　生

明道さん。

［文人、知識人を指す。］

［224］eme, eniye は共に「母」となる。

ama ene-i ［面と向かっては用いない］mujilen.

父　母　の　　心

父母の心。

calu cahin ama eniye-i-ngge.

倉　廩　父　母　の

倉廩のご両親どの。［対面で使用。］

［225］agu, age は共に男性の敬称である。

［ここで文章で用いられる agu はまた年長者に用いられ、先生に用いられる。話し言葉の age はまた皇族に用いられる。］

［226］cimari だけが「明日」を指すのであろうか。

jai inenggi［文人に対する答え］, zi lu ji-fi ala-ha.

明日　　子路が来て告訴する

明日子路が行って訴える。

jai inenggi［明日について聞き、述べるとき］ uthai jura-ka.

明日　　必ず　　出発する

明日必ず行く。

［227］seibeni だけが昔という意味なのか。

seibeni［昔は］　mini gucu.

昔は　　私の　友

昔は私の友人だった。

si　　ji-fi udu inenggi o-ho, hendu-me, cananggi［前日］.

あなたは来て幾　　日　　した　言うには　　一昨日

あなたは来て何日になるか。曰く、昔だ。

sikse［昨日］　nime-mbihe, enenggi yebe o-ho.

昨日　　病んだ　　今日　　よいなった

昔は病気だったが今日は元気だ。

（日本語でも「きのうの味方が今日は敵」というような言い方がある。）

（中国語の単語と満洲語の単語は一対一に対応するとは限らない。）

［228］「有」や「曽」に子を付けるのは何のためか？

leulen gisuren bithe,

論　　語　　書

「論語」の書にこうある。

iuzi, zengzi［これらは尊称］-i ʃabi-sa-i　ʃangga-bu-ha-ngge ofi,

有子曽子　　の弟子たちの完成させ　た　のは　できて、

有子、曽子の弟子たちがまとめたゆえに

tuttu　　ere bithe de, geni　juwe nofi be　teile　　zi

このようにこの書　に　彼らの　二　　人　を　それぞれ　「子」

se-me　　tukiye-he-bi.

と言って持ち上げたのか。

その書を、この二人だけ「子」を付けて呼んでいる。

［229］「舜」と「紂」が　han　（王）でないのは何のためか？

huun you　［まだ位を得ていないとき］han de aisila-mbi.

舜　堯　　王　に　助ける

舜が堯を助ける。

iui, ʃuun han [既に位を得ているとき] de aisila-mbi.

禹　舜　王　　に　助ける

禹が舜を助ける。

juu han［既に位を得ているとき］-i beye de isi-nji-fi, abka-i fejergi deli

紂　王　　の自己に　近づいて天　の　下　　また

ambula faguhuun　　o-ho.

大　　混乱した　なった
紂の時、天下は大きく乱れた。
（舜、堯、紂を漢文では王と呼ぶことを避けている。）
emhun haha, juu［位を失ったとき］　be waha　se-re donji-ha.
ひとりの男子紂　を　殺した　と　聞いた
ひとりの男、紂を殺したと聞いた。
［230］昔の酒には arki (蒸留酒)はなかった。現代の酒には nure という種類がある。
［ぴったり当てはまる言葉は多いのではあるが、その道を得れば極めてやさしくなり、その道を得ないでいれば難しい。道とは何か。理である。そこに至る決まった筋道というものはなく、定まった方法もなく、ただ用いるということがあるだけである。精神は明らかである。そこで「本当の意味」を得るのは変則的方法に属する。
（難解な文章であるが、翻訳方法を学問的に扱うことができないことがあるということを述べたものか。）
［231］訳文の漢文は本文に沿ったのがよいのであり、翻訳時に欠けたところや追加があってはよくない。
［漢文には詳しく述べたり簡潔にしたりする方法があるが、満洲語もまた同様である。漢文の文法は空白部分が神髄を伝え、人をして納得させるというところがあり、それゆえ、簡潔であっても何かが欠けているわけではない。満洲語の文法は空白部分に心を補い、人をしてその中に入らしめ、それゆえ、語をふやしても隙間が多くあったわけではない。漢文はいつも補助語を用い、補助語は音律を整える。満洲語の文はいつもことばの省略を用いるが、言葉の省略は精神の清さであり、ともに文彩をおだやかにし、かつまた語の増減をしたという跡を残さない。詳しく述べたり略したりする方法もまた同様であり、異なるところはない。人はあるいは漢文を非常に難しいと感じ、満洲語の文章を非常にやさしいと感じるかもしれない。彼は満文の文章の妙味を知らないのみならず、漢文の妙味も知らないのである。少ししか見ない人は自ら一編の議論を書き、あるいは何段かの文章を取り出して、その筋道が通っているようだと判断し、ちょっと訳してみる。そして欠点を積み重ねるのだ。このゆえにこれを眺めると、満洲語の文法は漢文よりも緻密のようだ。私はいつも述べ尽くさないでいることはできない。熟慮して翻訳するとき、最初は言葉が多くないように見えるが、それはすなわち欠けているということである。それ故に、増減の法を設けるのである。
［232］魂が足りないものは補わなければならない。
udu　baitala-ra-kuu o-ki　se-he　se-me
しかれども用いない　ようにしたいといったと言うなら

雖欲勿用、
用いたくないと望んでも
alin bira-i enduri［神という語を補う］ tere-be hata-mbihe-u?
山　川　の　神　　それを　嫌っていたか
山川其舍諸？
山や川がそれらを捨てたのか？
tulergi aiman ejen bi-sire be sa-ra ba-de［「なおかつ」という語を補う］,
外面的 部族部落君主いるのを知るところを
異民族の君主がいるが、
tuhimbai gurun-i elemangga［「背く」という語を補う］ akuu-i gese
夏（？）国の背いて（副詞）　…でないのように
adali［「似ているように」という語を補う］ akuu　　kai.
同様に　…でないのだった
夏の国の背いたようではなかった。
sa-ra-ngge be sa-mbi se［「命ずる」という語を補う］
知るの　を　知る　と言え
知っていることは知っているのだ。
sa-r-kuu-ngge be sa-r-kuu se［「命ずる」という語を補う］
知らないことを知らないと言え。
知らないことは知らないのだ。
ere　uthai　sarasu kai.
これすなわち 知識　なのだ
是知也。
これが知るということだ。
tere-i yabun be tuwa-ra, tere-i deribun be cincila-ra,
彼の　行い　を 見る　　彼の　始め　を つぶさに見る
彼の行為を見、その原因を観察することを
tere-i sulfangga be　kimci-re　oho-　de
彼の 心豊かなのをよく調べるとなったことに［伝言文を補う］
彼のおだやかさをよく見ることを
niyalma adarame dalda-mbi-ni?
人　　どうして　隠す　　のか
人はどうして隠すだろうか。
gosin jurgan yaksi-me　si-bu-ci,
仁　義　閉じて　ふさがれるなら
仁義が完全にふさがれるなら

gurgu ba yarhuuda-me niyalma be ulebu-mbi　se-re
　獣　を　導き　　人　　を 食べさせる という
anggala［「のみならず」の語を補う］,
のみならず
すなわち獣を導いて人を食べさせ（ここに「のみならず」の語なし)、
niyalma ishunde je-ndu-re isi-ka.
人　　互いに　食い合う　に至る
人がまさに互いに食い合うことになる。
damu yekengge niyalma,　ejen-i mujilen-i waka be tuwancihiya-me
ただ　偉大な　人（だけが）君主の心の　不適切を　正しくして
mute-re be oyonggo［「を要するため」を補う］ o-bu-ha-bi,
できるのを 必要な　　したのか
ただ偉大な人物のみが君主の非を戒め、
tere-i amala teni　dulimba-i gurun de ji-fi,
その　あと　やっと　中央の　国　　に 来て
その後の中国で
abka-i jui-i sourin de tehebi.
天の　子の　位　　についた
天子の位についたのだ。
aika jaila-ha-kuu［「もし避けられないなら」という語を補う］
もし避けなかった
uthai　you han-i gurung de te-re,
すなわち堯 王の　宮　　に 座す
そして堯の宮に住んだ。(aika …からの部分の訳)
you han-i jui be hafira-ra　oci,　　tere duri-he-ngge dabala.
堯　王の 子 を 追い詰めることになってそれ奪ったのは　…ならばよい
堯の子を追い詰めて、これを奪った。
［233］ 意がこもり過ぎているものは取る。
jurjun toniu efi-re-ngge akuu-n, tere　tere-ci　yebe dere.
双六　碁石　遊ぶのは　ないか それ それより良い のではないか
碁を打つ者はいないか、これよりも［取る］賢いのではないか。
gurun bou de fafun ili-bu-ha-ngge,
国　　家　に 法律　立てた　のは
朝廷立法之意
朝廷が法律を立てる意義　［取る］は
couhome irgen-i balai　　yabu-re be　naka-fi,

特に　　民の　みだりに行うの　を　止めて
民のすべきでないことをするのを禁止する、
yarhuuda-me sain be yabu-kini　se-mbi.
導くには　　よいを 行わせておけという
民を導いて［取る］善を行わせる。
［234］（満洲語の？）だぶついたところは削って、縫い目を見せない。
dahuu-ci,　uthai ［削る］o-mbi-kai. muke se-re ［取る］ jaka.
繰り返せばすなわち　　できるか　　水　　という　　物
繰り返せばできる。流水も物である。
bi urunakuu gosin akuu.
私　必ず　　仁　ない
私は必ず仁がなく、
urunabuu dorolon akuu ba-　bi　dere［削る］
必ず　　礼　　ない地方あるだろうか
必ず礼もない。
akuu o-ci［削る］ ere gese-ngge　ainu ijishuun ni?
ないとなるなら　この 同様のものなぜ 順調なのか
これがどうしてよいことがあろうか。
［（［232］の）補う方法と少し異なる。］
［235］だぶついたところは削って初めて合格となる。
julge-i fon-de,
古いの 時 に
昔、
bou-de o-ci　　urebukuu gaʃan de o-ci　huuwaʃabukuu,
家 でできるなら復習した村　　でできるなら 仕上げた
家で復習があり［削る］、村で仕上げがあった［削る］、
jeu de　o-ci　　mutebukuu,
州　でできるならなさしめた
州ではじめがあり［削る］、
gurun de o-ci　tacikuu bi-he-bi　［de をとる語が 4 つある］
国　でできるなら学んだあったある
国で学びがあった［削る］。
houʃunngga oso, senggime oso se-fi, [oso の付く語が（以下の部分も含め
孝行　　であれ、友愛であれと言って　　て）3 つある］
孝行であると言って［削る］、友愛であると言って［削る］、
geli huuwaliyasun oso se-he-bi.

また和合　　であれというのか
また続けて和合だと言うのか［削る］。
［(［233］の)「取る」とは少し異なる］

［236］これらがうまくいっていないと、ただただ漢文にこだわることになる。白鳥を刻んだり、蛇の足を数えたりするように、うまくいかない。

［補おうと補うまいと精気がなくなると、白鳥を刻んでアヒルになるということになる。余分なものを減らそうと減らすまいと、蛇の絵に足を加えると、漢文にこだわり過ぎたということである。］

［237］正しい方法というのはやさしいところに従って、型破りなことをしない。また、何かをでっち上げたり、みだりに細かいことをさがしまわったりするのをやめる。平地の千のみぞを重ねてなくす。静かな流れと大波をさがして隠す。虚実（情況）と抑揚はそのやり方に従う。正直にかえってもとのわだちに従う。しかし出来上がったものを説明すべきか慎むべきか。行き過ぎて、車をひっくり返すのではないかと恐れるには及ばない。

［まさに翻訳とは一つの大きな技術である。その中にひそかに他の意味を持ち込んで隠すことは許されない。それゆえ、正統的方法を固く守ることが求められる。軽々しい態度ではいけない。それゆえ、十分でないところを通り越す。自ら憶測で作り上げるようなことを放任してはいけない。深く隠れたカギをさがせば、穴に至って波乱を起こし、人をあきあきさせる。最高の好奇心の人を見てみると彼は「聖諭広訓」、「四書五経」、「古文淵鑑」などの書を変化に乏しいと考え、奇怪なよけいな文があちこちに見受けられ、そのことと本来の性質がお互いに近いため、ゆくゆくは１つになる。いつもの書名に会っても、また必ず新たに翻訳しようとの心を起こし、そしてみずから得意になる。人をしてわからないようにさせていることをよく知れ。］

［238］逐語訳することと意味を直接訳すことは両立しない。言葉を犠牲にして意味を訳せばかえって明らかになる。ただし意味に達することができなければならないのであって、重箱の隅をつつくようなことをすると、かえって穴をあけてしまうことになる。

［意味をとるということが必要なのであり、本文に関わり過ぎるあまり文を重ねることになる。訳がはっきりしないというのは訳ができないということである。十分に謙虚にすべての精神を統合し、いささかも意味をもらすことなく、理が明らかになるようにし、言葉がなめらかになるようにする。語にはとぎれたところがないようにし、洗練されたものとする。決まり文句を使わず、細かい細工をせず、意味を近づけ、わかりにくいところをてらす。非常に慎重にやるべきである。］

cohome duin mederi uyun jeu-i geren irgen be faifin-i banji-kini
特に　四　海　　九　州の　多くの民　を太平に生活させておけ

se-mbi.
と言う
誠に四海九州において庶民を安らかならしむることを望む。
adaki bou baita ufara-ci,　fuhali dalja-kuu　o-bu-fi tuwa-mbi.
隣の　家　事情まずくなるなら全く関係がないとして　見る
隣の家の災いをこともあろうに平静に見守る。
meni meni yada-ra teisu be tuwakiya-me elehun-i tu-ci-me dosi-me,
各自各自　貧窮する 分 を　見守り　　やさしさの 出て　　入り
使蓬門蓽戸出入優游
赤貧洗うがごとき家の人を出入りさせ、やさしく接待し、
baita akuu tafin-i banji-re huuturi be ali-kini　se-mbi.
事情ない太平に暮らす　　福　　を受けるがいいという
太平無事に生活する幸いを共に受ける。
julge-i doro ufara-bu-ha　be daha-me,
古いの　道　そこなった　を　よって
古えの道がなくなり、
gurun-i fafun de guwe-bu-ra-kuu kai.
国の　　法律で　罪をゆるさないのだ
国の法律があるゆえに罪をゆるさない。
antaha isa-ha de isingga-i　　omi-bu-mbi.
客集まったとき　間に合ったもので飲ませる
斗酒＊（ここの漢字は女偏に吳）賓。
酒を持ってきて客を楽しませる。
［239］正統的翻訳の方法がうまくなじまない場合は、変換したり倒置したりするとよい。
abka-i fejergi, jin gurun ci etenggi-ngge akuu.
天の　下　　晋　国　　より 強い　は　ない
晋国は天下に強いのではないか。
feng fu jin gurun-i niyalma,
馮　婦　晋　国　の　人
晋に馮婦という人がいた。
kumun　de　sijirhuun-i karula-mbi.
うらみによって正直に　　報いる
正直な者にうらみを報いて、
erdemu de erdemu-i karula-mbi.
徳　　で　徳　　に　　報いる

徳をもって徳に報いた。

nomhon sain niyalma, kemuni jalingga koimali balai hergi-me yabu-re

まじめなよい　人　　常に　腹黒い　みだらな狡猾なぶらぶらして行く

urse　de uʃata-bu-re　　be　sa-ci　o-mbi.

多くの人に無理に連れて行かれるのを知ることができる

狡猾でみだらな者をのさばらせるには、善良な人をしばるだけで十分だ。

［240］似た言葉を避けたり、リズムを整えたりするために倒置しなければならない場合もある。

bithe-i jurgan-i adali［同じ］　encu［異なる］,

書　の　義　の　同じ　　別の

異同

文義の異同、

guunin ici-i　ʃumin［深い］　micihiyan［浅い］,

意志　の方向の深い　　浅い

思うところの深い浅い、

gisun mudan-i ujen［重い］　weihuken［軽い］,

言葉　声　の　重い　　軽い

言葉の声の軽重、

amba［大］　ajige［小］　songkolo-ho-bi.

大　　小　　よったのだ

小大

大小はこれによったのだ。

juse　［似た言葉を避けた］sargan be uji-mbi.

子供ら　　妻　を　養う

妻子

妻子を養う。

［241］翻訳にはまず語の用い方を学べ。語幹や語尾、助詞を明らかにせよ。名詞とは、語幹や意味が固定したもののことである。

iregen. gosin.

民。　仁。

［この二字は名詞であれ、動詞であれ、それ以外であれ、文の骨組みをなすものである。］（整字という語が使われているが、当時の専門用語か。）

［242］語尾とは筋であり虚字であり、用法であり、生きた言葉である。

uji-mbi. yabu-mbi.

養う　行く

養う。行く。

［この 2 つは語尾であり、虚字、生きた言葉であり、筋を示し、用法を示す。］

［243］格助詞・接続助詞・名詞は筋を骨組みにつなげる。

irgen be uji-mbi. gosin be yabu-mbi.

民　　を　養う　仁　　を　行う

民を養う。仁を行う。

［244］名詞・動詞は語尾・格助詞・終助詞とつながって意味をなす。

irgen[体言] be uji-re［動詞］　doro［体言］

民　　を　養う　　道

民を養う道。

gosin［体言］be yabu-re［動詞］　fulehe［体言］

仁　　を　行う　　根本

仁を行う本（もと)。

［245］インドの首飾りのように意気を長く、骨を密にする。次第に節々が貫通する。

touse miyalin be girala-ra［一節］

権力　量　　を　守る

権力の量を守る（過度に権力をふるわない)、

fafun kouli be kimci-re［一節］

法律　法令 を よく調べる

法制をよく調べる、

waliya-bu-ha hafa-sa be tuwancihiya-ra［一節］　jakede,

捨てられた　役人たちを　正しくする　　ために、ゆえに

解任された役人を正しくし、

duin ergi-i dasan yabu-ha-bi.

四　　方の　統治　行ったのだ

四方の政治を行ったのだ。

mukiye-he gurun be yende-bu-re［一節］,

滅びた　　国　　を　興し

滅びた国を興す、

lakca-ha jalan be sira-bu-re［一節］,

絶えた　世代　を　続けさせる

絶えた世を続け、

sula　irgen be tukiye-re［一節］　jakade,

散った民　　を 持ち上げる　　ために

散った民を持ち上げる、

abka-i fejergi-i irgen mujilen daha-ha-bi.

天　の　下　の 民　　心　　従ったのだ

天下の民は心をもとにもどしたのだ。

（「…をし、…をし、…をするために」の例）

［246］大きいものは全体をまとめて一つのところに小さくする。骨は硬く筋肉は柔らかく、曲がるのにまかせる。

［体の内臓は屈伸に従い、筋肉・骨を用いる。用い方が適当でないと、気が滞り、血がかたまる。そして使い物にならなくなる。］

［247］筋肉にあたるのは -i, -ni（共に「の」）、-ra, -re, -ro（共に未来分詞語尾）、-ka, -ha, -ke, -he, -ko, -ho（以上過去分詞語尾）、de（「に」）、be（「を」）、-ci（「から」）、-fi（「…して」）、-me（「…するため」、「…しながら」）である。これらは多く用いられる。

［この 16 の形はすべて語幹につながり、あとに意味をつなげ、言葉遣いを形成する。必要だからあるのであり、会話には必ず出てくる。まさに無数の単語をつなげて文にするものである。これだけがかなめとなるものである。ゆえに年長者は言う。「骨も筋肉がなければ動かず、筋肉も骨がなければばらばらになる。」この筋肉のたとえはよく言い当てている。］

［248］また針によって衣類を縫い合わせるときはすぐに終わらせる。縫うことがなければ合うこともない。

［すなわち「翻訳文は衣服のようなものだ。1 つの文は布きれのようなものだ。」上の 16 の形は縫い糸のようなもので、終止形語尾の -mbi を取って、他の語と結びつける。縫うところは布の幅に合わせる。そうすれば衣服ができないことがあろうか。これがやさしいことは明白である。もし de, be, -i, ci （てにをは）が何かの語についていても、その語の意味を変えるわけではない。］

bira-i［の］　ebergi　ba　yuyu-ci［ならば］

川の　　こちら側　地方飢饉になるなら

河内凶

川のこちら側が凶作なら、

uba-i［の］irgen be[を］bira-i[の］dergi ba-de[に］guri-bu-me[…し]

ここの　　民　を　　川　の　東方　場　に　移らせ

すなわちその民を川の東に移住させ、

tuba-i［の］jeku be[を］bira-i[の］ebergi ba-de[に］guri-bu-he[した]

そこの　　糧食を　　川の　　こちらの場に　　移らせた

そこの糧食を川のこちら側に移した。

gucu-se bi-fi[して］goro ba-ci[から］ji-ci[すれば], inu sebjen waka-u?

來

友人たちいて　　遠い場所から　　来れば　　また楽しみでないか

友がいて遠方から来るのは、また楽しいことではないか。（論語の言葉）

［249］頭から腰、そしてかかとに至る。油は酒に沈み、水は手のひらに。

［この項は言葉の息吹の脈をはっきりさせることについて。先頭から始めて、あるいは一、二語、あるいは十数句にも及ぶ等、長さは一様ではない。語気のあるところに至り、必ず前の語句を受けてそれをまとめたところがある。これは冒頭から中央部分に至って文の前半をまとめたところであり、あるいはその言葉を用いて以下の部分に続け、あるいは他の言葉を用いて文が続くようにし、あるいは過度の文を用いることなく、そこで文を終わらせる。意味のカギとなるところのものによって次の文を起こし、まとめる。これが文の中ほどから終わりまで文の後半部分をまとめるということであり、まさに限界を分かち明らかにするということである。油が酒に沈み、水より軽いというのは、試みに油を酒の中にしたたらせればすなわち沈み、水中にしたたらせればすなわち浮かぶ。どちらが起き上がりどちらがとどまるのか。漢文の語気においてこれを求め、語気をとどめる道はこのようなものである。］

（長い文章の翻訳においては、連続感が絶えずあるようにする。）

aikabade han o-ho niyalma bi-he-de［この語は文の腰の部分］,

もしも　王となった　人　　いたとき

王がいるなら、

urunakuu jalan o-ho manggi teni gosin o-mbi.

必ず　　世　　なったあとにやっと仁　となる

必ず世はその後仁となる。

aikabade irgen de neigen isibu-me,

もしも　　民　に　平均　至らせる

geren de tusa o-bu-me　　mute-ci, antaka

[他の言葉を腰の部分とする]？

多い　に益　ならしめる（ことが）できればどのように

多くの民に施しをして救うことができればどうだろうか？

gosingga se-ci　o-mbi-u?

仁愛的　と言えばできるか

仁愛と言うべきか？

ama eme-i se be［腰］, guuni-ra-kuu　o-ci　o-jora-kuu.

父　母の　年を　　思わない　できるならいけない

父母の年を知らないでいるわけにはいかない。

taci-re niyalma lergiyen　fili　akuu　o-ci o-jora-kuu［以下の言葉が必要］.

学ぶ　　人　　広い心の堅固なでないならいけない

学ぶ者は心広く、意志が固くなければならない。

ali-ha-ngge ujen on goro o-ci　　kai.

受けたのは重い道程遠いできるならだ

任は重く道は遠い。

gosin be beye-de ali-ha-bi［終止形］, inu ujen waka-u?

仁　を 自身に 受けたのだ　　また重いではないか

仁義を受けたのだ。これまた重いことではないか。

buce-he manggi teni naka-mbi［後につなげる］, inu goro waka-u?

死んだ　あと　　今　やめる　　また遠いでないか

死而後已。

死んでしまったが、遠い昔ではないか？

［250］言葉に照らして頭を整え、その場に応じる。

（対比の文では文頭と文末に注意せよとの意か。）

duibule-ci[対照], goro yabu-re de,

比べれば　　遠い 行く　のに

urunakuu hanciki　ci deribu-re adali[同様],

必ず　近いところより始めるのと同様

辟如…

遠くに行くには近いところから始めるように、

duibule-ci［比較］　den be tafa-ra de,

たとえるなら　　高いを　上る　のに

urunakuu fangkala ci deribu-re adali［同様］.

必ず　　低い　　より始める　のと同様

辟如…

高いところに行くにはまず卑しい身分から始める。

ci gurun-i niyalma-i hendu-he gisun,

斉　国の　人　　の　言った　言葉

斉国の人曰く：

udu［ seme と呼応］　mergen su-re　bi　se-me［ udu と呼応］,

しかれども　　賢人　かしこいある言うには

雖有…

「知恵があると言っても

nashuun be amca-ra de isi-ra-kuu,

機会　を 追う　のに近づかない

不如…

機会をとらえようとしない。

udu［ seme と呼応］ usin-i aguu-ra bi se-me ［udu と呼応］,
しかれども　　田地の　道具ある言うには
雖有…
農具があると言っても、
erin be aliya-ra be isi-ra-kuu se-he-bi ［henduhe gisun と呼応］.
時　を　待つ　を　及ばないと言ったのである
不如…
時を待つことをしない。」

［251］不完全文は以下のものを出してきて、すべてを述べてから締めくくる。

duka dosika manggi,
門　　内側に　の後
門を入って、
ibe-fi　ici ergi amban-i baru　gisure-re-ngge, inu bi,
前進して右方向大臣の　に向かって話す　　のは　またある
進んで右の大臣の話すのはこうだ、
ici ergi amban-i te-he ba-de gene-fi,
右方向　大臣の　座った場に行って
右側の大臣のところに行って、
ici ergi amban-i baru　gisure-re-ngge, inu bi.
右方向　大臣の　に向かって話すのは　　またある
右の大臣の話すのはこうだ。
yaya abka-i fejergi,
諸々の天の　　下
gurun bou be dasa-ra de uyun enteheme bi,
国　　家　を治めるのに　九　　永久の　ある
すべての天下の国家を治めるのに九の永遠のことがある、
beye-be tuwancihiya-ra saisa be wesihule-re,
自己　を　正しくする　賢人　を　尊ぶ
曰く、自らを修め、賢人を尊び、
niyaman be niyamala-ra, ujula-ha amban be kundule-re,
親　　を　孝行する　　首である大臣　　を　敬う
親孝行をし、大臣を敬う、
geren hafa-sa be gilja-ra,
多い　官たち　を　許す
多くの臣をねぎらい、
geren irgen be jui-i gese o-bu-re

多くの民　　を子のようにならせる
多くの民を自らの子と思い、
tangguu faksi-sa be ji-bu-re, goroki niyalma be bilu-re,
百　　職人たちを来させる　遠方　　人　　をいつくしむ
百人の職人たちを来させ、遠方の人をいつくしみ、
golo-i beise be hefeliye-re be hendu-he-bi［以下に「曰く」を付ける］.
省　の侯　を懐におさめるを　言ったのである
也
諸侯を懐におさめるのである。」
ama eme-i tokto-bu-re, jala urse-i　　heje-re　　be aliya-ra-kuu.
父　　母の　決める　　仲人多くの人の婚約をするのを待たない
不待父母之命媒酌之言。
父母の決めた仲人の言葉を待たない。
［(漢文では不待…媒酌之言となっているが）冒頭の言葉（ここでは不待）が最後（ここでは言）までかかわるのはちょうど油が酒の底までまっすぐ沈むようなものだ。］
［252］「引き継ぎ」「中断」は多くの場合、非常に長い部分のあとで完結する。-kuu -kuu -kuungge（なく…なく…ないのは）　-ki -ki se-（…したく…したいと思う）。
bayan wesihun se-me, dufede-bu-me　　mute-ra-kuu,
富　　貴い　　と言う淫乱におちいらせるできない
不能
富者と貴人は淫乱に落ちることができない、
yadahuun fusihuun se-me, guri-bu-me mute-ra-kuu,
貧しい　卑しい　と言う　移す　　できない
不能
貧しく卑しい人は移動させられない、
gelecuke horon se-me bukda-bu-me mute-ra-kuu-ngge oci,
恐るべき　武力と言う　くじく　　できない　のは　のであれば
不能
恐るべき武力は屈服させられない、
ere-be yekengge haha se-mbi.
これを　偉大な　男　と言う
これを大丈夫（だいじょうふ）と言う。
ejen ofi,　　ejen-i doro be akuumbu-ki,
君主になって君主の道　を　尽くしたい

欲爲君盡君道

君主になって君主の道を尽くしたいと思う、

amban ofi, amban-i doro be akuumbu-ki se-mbi.

大臣になって大臣の道　を　尽くしたいと言う

欲爲臣盡臣道

大臣になって大臣の道を尽くしたいと思う。

［253］三つの語尾 -ra, -re, -o は最後に -ngge を付けることによって一つにまとまる。

eye-re sirkede-re dufede-re ufara-ra-ngge,

流れる　続く　　淫らになる失敗するのは

流連荒亡

流れ続けて荒れて滅びるのは、

golo-i beise　　de jobolon o-hobi.

省の　貝子（ベイス）（官職名）に　憂いとなった

爲…

諸侯の憂いとなった。

［254］-ra, -re, -ro の語尾が連続して出てくるとき、oci, de, be という語がそれをまとめる。

tere-i ama ahuun be wa-ra, tere-i juse deute be oljija-me huuwaita-ra,

彼の　父　兄　　を殺す　彼の　子ら弟たちを捕虜にする　縛る

若殺其父兄、係累其子弟、

もし彼の父や兄を殺すなら、そして彼の子や弟たちをとらえるなら、

(oljija-me は oljila-me の誤記か？)

tere-i muktehen be efule-re, tere-i ujen tetun be guribu-re oci,

彼の　礼拝所　　をこわす　彼の　重い　器　を　移動するなら

毀基宗廟、遷其重器

彼の礼拝所をこわすなら、彼の重い器を移動するなら、

（漢訳では器とあるが、満洲語には「ひつぎ」の意味もあるのでひつぎのことか。）

adarame o-mbi-ni?

いかに　なる　か

どうであろうか。

zi hiya-i duka-i ʃabi-sa, fuse-re, eri-re, acabu-re,

子夏の　門の　弟子たち　育てる掃除する接待する

jabu-re, ibe-re,　bedere-re de,

答える　前進する退く　　のに

子夏の門下の者たちは草木を育て、掃除し、接待し、出入りすることが
o-ci o-mbi, eici　dube dabala.
もしできるあるいは末端よし
できるならよしとした。
fuse-re, eri-re, acabu-re, jabu-re, ibe-re, bedere-re hacin dorolon.
育てる掃除する接待する　答える前進する　退く　事項　礼
花を育て、掃除し、接待し、受け答えし、進退する、これらの礼を、
nomun, dabtan, jafan, ara-ra, bodo-ro, ʃu be tacibu-mbi.
経書　弓術　馬術字を書く計算する文 を 学ばせる。
経書、弓術、馬術、書道、算術、文筆を学ばせる。
te-bu-re uji-re be tacibu-mbi.
植樹する養う　を　学ばせる
植樹と家畜の世話を学ばせる。

［255］名山は俗人の称賛をまぬかれない（俗人もそれ以外の人も名山をほめる。主語等が複数ある場合）。

mute-mbi-me mute-ra-kuu de fonji-re [-re],
能力があるのを能力がないに　問う
能力があるのに能力のない人に問う、
labdu bi-me,　komso de fonji-re [-re],
多い　あるのと少ないに　問う
多いのに少ない人に問う、
bi-mbi-me, akuu-i adali [-li],
あるのと　ないの同様
あってもないかのようであり、
jabu bi-me,　untuhun-i adali [-li],
満ちたあるのと無物の同様
豊富でも無一物のごとく、
neci-he　se-me, guuni-ra-kuu-ngge [-ngge],
罪を犯したという　思わない　は
罪を犯しても正すことをしない、
seibeni mini gucu, kemuni uttu　yabu-mbihe.
昔　私の　友　常に　このように　行っていた
昔は私の友は、かつてこのように行っていた。

［ここで一つの-ngge は 2 つの -re と 2 つの li と一つの -kuu を受けている。雅俗とも共にほめる場合にも似ている。］

［256］高い丘は靴の客が行くのをどうして妨げるだろうか。（いろいろな人が山

に登る。いろいろな語形のものが同等に主語になったりする。)

usin-i niyalma [niyalma], faksi-sa [sa], huudaʃa-ra,

田地の　人　　職人たち　　商売をする

maimaʃa-ra urse [urse], gulu　gulu nomhon　o-joro　be

商売をする　多くの人　純朴な純朴なおだやかなであろうを

ufara-ra-kuu o-mbi.

誤らない　となる

農民・職人・商人たちは純朴だと言える。

［niyalma と –sa が共に用いられている。この 2 つは靴を履く姿にも似ている。この 2 つは、常にバリエーションである。よく理解せよ。］

［257］文章法には「起承転結」というものがあり、また「理弊功効（正論と誤った論をつきあわせて結果を出す)」という方法もある。

［文章法は多いのではあるが、「起承転結」だけではなく、「理弊功効」もあり、それ以外にはない。］

（理弊功効とは何であるか、はっきりしないが、以下の説明や用例から、簡単に次のように例示してみる。

理―仕事には楽しいところもあるが

弊―困難も多い。

功―しかし一生懸命仕事をするなら

効―それにより他の人々を益することができる。)

［258］「起」で不明確ながら議論が始まり、「承」で以下の部分が続いて明白となり、「転」で話が変わり、「結」の部分で文がまとまる。

［最初の一声の語がどれほど足りなくとも、すべてを受け継ぎ、望む方向に話を向ける。これが「承」ということである。「承」とは言葉を起こすことである。そして文を進めると話が一転する。これが「転」ということである。話が変わったところを以下の文でまとめる。これが「結」ということである。この「結」は話が変わったものをまとめるものである。］

ama eme-i bi-sire de, goro gene-ra-kuu,

父　母の　　いるのに遠く　行かない

父母がいるから遠くへ行かない、

gene-ci, urunakuu ici be ala-mbi.

行くなら　必ず　方向を告げる

行くときは必ず方向を告げる。

doro yabu-ra-kuu ni-kai, ada　de te-fi mederi de aili-na-ki,

道　　行かない　かな　いかだに座って海　　に　回り道したい

道を行かず、いかだに乗って海を行こう、

nimbe daha-ra-ngge, tere iu dere?
私に　　従うのは　　その由だろうか
私に従うのはこういうことなのか？

［259］「理」とは理に従えばこうなるということであり、そうでなければ「弊」が理を失ったものとして現れる。実際のわざ「功」を用いることによって結果「効」が出て来る。ohode (であるときは)のあとに dahame（…によって）が続き、ohode は自ら「功」に至り、dahame すなわち結果は理の中にある。「聖諭広訓」の中にこの「理弊功効」は極めて多いのであるが、かなりの量になるので、すべてを記すことはできない。選んで取り、ohode, be（を）dahame の用法を論述した。全体を見て、自ら選んで読んでほしい。

duibule-ci, jui o-ho niyalma, ama eme be uile-re de,
比べるなら子なった　人　　父　母　を仕えるとき
たとえて言えば人の子が父母から、
delhe-fi　　boigon ili-bu-ha amala,
家産を分けて家産　　立てた　後
遺産を分けてもらって家業を立てた後、
urunakuu suilacun be ali-me erʃe-me　uji-re o-ho-de,
必ず　　貧困　を　受け　親を扶養し養うとなったとき
必ず苦労し親を扶養することになり、
teni jui-i doro be akuumbu-ha se-ci o-mbi.
やっと子の道を心を尽くしたと言えばできる
やっと子の道を尽くしたことになる。
ama eme o-ho niyalma hing se-me gosi-me tuwaʃata-me karmata-ra de,
父　母　となった人　　一生懸命いつくしみ　世話し　　世話する　のに
また父母となった人は一生懸命世話をするのに
umai huusun funce-bu-he-kuu bi-me,
全く　力　　余らせなかったであり
力が十分ではなく、
jui o-ho niyalma, elemangga ulin be cisule-me.
子となった人　　かえって　　財　を　独占して
一方子となった者は財をひとりじめにする。
icangga ulebu-re be touka-bu-me,
好ましいもてなすを　遅れさせて
快くもてなすのをおこたり、
urgunje-bu-me uji-re be heulede-ci,
（親を）喜ばせ養う　を　おこたれば

親を喜ばせ、養うことをおこたれば、
kemuni niyalma-i jui seci o-mbi-u?
なお　人　の　子というならできるか
それでもその人を人の子と言うことができるか。
uttu o-fi bi dahuun dahuun-i targa-bu-me tacibu-mbi,
このようになって私はたびたびの　戒めるには　教える
このように私はたびたび教え諭した、
mini guunin de suweni geren couha irgen,
私の　意　に　君たちの多い　兵　民
私は君たち兵・民に願う、
dergi de o-ci, couha gurun be guuni-re,
上　でできれば兵　国　を　思う
上では軍国を思う、
fejergi de o-ci, beye bou be guuni-re,
下　でできれば自ら家　を　思う
下では自身と家を思う、
tulergi de o-ci, tondo be akuumbu-re gebu be youni o-bu-re,
外面　でなるなら忠誠　を　尽くす　名声　を　全くあらしめる
忠誠だという名声を外面ではあらしめる、
dorgi de o-ci, sebjele-me
内側　でなるなら楽しみ
banji-re yargiyan be baha-ra o-ho-de［前は功、後は効］
暮らす　真実の　を　得る　となったのに
内面では楽しみの真実を得て、
hafan de suila-ra-kuu yamun-i urse de jobo-ra-kuu be daha-me[効を得る］
官吏　に苦労しない　役所の多くの人に苦しまないを　従って
官吏に苦労せず役所の人々にうれえない、
sebjen ere-ci dule-ndere-ngge bi-u?
楽しみ望むなら過ぎて、越えてはあるか
それに楽しみはあるのだろうか？
suweni geren couha irgen, ʃumin dobori kimci-me seule-ci,
君たちの多い　兵　民　深い　夜　よく調べて思いめぐらすなら
君たちの兵や民は深夜自ら思いめぐらし、
mini guunin de aca-bu-ci aca-mbi.
私の　意　に　合うなら　合う

それはみな、私の望むところだ。

［260］大ざっぱに分けるには、連ごとに分けることが必要である。狐のわきの下の毛皮も寄せ集めれば毛皮の上着になる。板も変化して生きたものとなる。口の息が蔵にぶつかっても露にはならない。まだ粗雑なままの言葉をよくかみしめる。自ら起承転結の場所を得て、言葉が余分の場合は多すぎるものを省くべきである。

［漢文の息吹のように連続して絶えることなくせよ。ある字句はそぐわずうまくつながらない。起承転結がしかるべき位置にないときには、これは字句が多く、息がたまって結露しない。これは漢文とは言えず、実際に段落というものがない。このような字句に出会ったならば、口頭の粗雑な言葉を解きほぐし、その余分な言葉を口の息吹で自ら現れさせる。太くつながるとは、起承転結をもって、あるものを断ち、あるものを落とし、自らはっきりしないものは痕跡を残さず、板を生きた木とする。大きく断つとは、起承転結をもってこれを連らね、これを結び、集め、結果としてちりも積もれば山となる。さらに字句過剰な文においてこれを用い、方法を習得することが必要である。まさに枝を節に分けてバラバラにし、限界を明らかにすることができなければならない。さもないと混乱することをまぬかれない。］

（文章の論理的な流れに注目せよとの意か。）

［261］顔面あるいは四つの眉では表情のある顔とはならない。ひじのないような腕は腕にはならない。

［この言葉は字句の多すぎる文は省略することが可能であり、そのままにしておく必要はないということである。字句の多すぎる文とは、oci（もし…ならば）、ofi（であれば）、 -hade, -hede（…したとき）、 ohode（なったとき）、 jakade（…のゆえに）、 be dahame（…に従って）、 tetendere（…ならばそれでよい）、manggi（…したとき）、seme（と言い）、 bime（…であって）、 gojime（…といえども）、 cibe（…しても）、 seci（と言うなら）、 sefi（と言って）、 bici（であるなら）、 bihe bici（であったなら）等の字句である。顔に眉があり、腕にひじがあるように、運動や表情はこれらの字句にかかっている。余分な字句のいらない自然界ではそれぞれの境界が明らかなように、省くことは可能なのである。用いるべきであるのに用いないのは、ひじのない腕のようなものである。省くべきであるのに省くことを知らないなら、用いることができるものを誤って多く用いることになり、すなわち眉の四つある顔のようなものである。昔の賢人はこう言っている。文のよけいに見える字句は、断じて省くことのできないもののようであり、やむを得ずこれを用いる。避けることのできないものであり、これを取り除く方法を知らない。以下にまたこれを用い、語気が乱れないようにし、これなしでうまくいくところはない。］

（漢文では接続語等を省略した表現が多いが、満洲語や日本語では接続語の省略はあまり多くない。）

［262］ここにあげたいくつかの規則を用例が大まかながら明らかにしている。助詞が出て来るときには漢文の訳文では使えない。

［助詞とは、de（に）、be（を）、-i（の）、ni（の）、ci（から）、kai（したのだ）である。もし助詞が用いられているなら、（訳文においては）それを用いることなく、格をわきまえて訳すべきである。もし満洲語にするなら、あるいはふさわしいものを用いる。これを出す、出さないのいずれも可である（文意やや不明）。］

（漢文では満洲語よりも、格助詞等の使用が少ない。）

［263］以下に連なり、文の前の部分に接するのに適しているのは接続語であり、字句を整えるのと同じで、便利である。

［前の部分とあとの部分をつなげるには、接続語を用いざるを得ない。もし語幹に連用形語尾がついていないなら、o（…か？）を加えるのがよい。語尾を付けて文をつなげるのと異なるところはない。 -kuu（…でない）のあともまた同様である。akuuci（でなければ）、akuuha（でなかった）のような成句のように、その例はここには記さなかった。］

gebu tob　akuu o-ci,　gisun ijishuun akuu o-mbi.
名　正しいないとなれば言葉　順調なないとなる
名がよくなければ、言葉も信頼できない。
（英語でも、No cross, no crown. という言い方がある。）

amba-sa　saisa gulu　o-ci　waji-ha, ʃu o-fi　aina-mbi?
大きいたち賢人 純朴なとなれば終わった文となってどうするか
君子が質朴であればそれでよい。文に記す必要があろうか。

ki gurun, temgetu o-me　mute-ra-kuu o-ho.
杞　国　証拠　となるにはできないとなった
杞不足徵也。
杞の国は証拠とはなりえなかった。

amba endebuku akuu o-ci　o-mbi-dere.
大きい過失　ないとなるならなるはずだ
大きな過ちはしなくてもすむはずだ。

tuttu　se-me, gosin o-joro unde.
あのように言うには仁となるまだ…ない
しかれどもいまだ仁ではない。

susai se o-tolo hajila-ha-bi.
五十歳なるまで親密に暮らしたか
五十而慕。

五十になれば慕われる。

gurun be taifin okini　se-ci　baha-bi-u?

国　を　太平ならせよと言うなら得たあるか

国を治めたいと思ってもできるか。

bi gisure-ra-kuu o-ki se-mbi.

我　話さないとしたいと言う

私は無言でいたい。

mujilen be tob　o-bu-ki se-re-ngge,

心　を正しいとしたいと言うのは

心を正したいと思う者は、

nene-me guunin be unenggi o-bu-mbi.

まず　意志　を　誠　とする

まずまことの志を持つ。

-me（するには）、-fi（して）、-ki（したい）、-cina（すればいいが）、-cibe（しても）、ci（するなら）（この形は語尾というよりは語）、-mbi（する）等は語尾である。-bu-、-su は使役形を作る。-bu-は語中にあって受動態を作る。以上のそれぞれは o-（なる）の語尾となる。ただ o-に -ra（ある）が付くと ojoro となる。–ka、-ha（…した）が付くと oho となる。-tala（するまで）が付くと otolo となる。 -rahuu（でない）、ayou（ではあるまいか）が付くと ojorahuu となる。

［264］-r, -ng, -k, -b, -n に終わる形容語のあとに se-（と言う）を続け、状態を表す。

［語幹のあとに ar, ang, ak (ek), ab, an の五形を付けて、se-（と言う）を付ける。あるいはこれ以前の部分、あるいはこのあとの部分を形容し、あるいは文を終わらせる。］

ler ler　se-re gese,　fur fur se-re gese.

ぞろりぞろりと言うようにそよそよというように

申申如也、天天如也。

ぞろりぞろりというようであり、そよそよというようである。

gucu gargan de, hing hing se-mbi keb　keb　se-mbi.

友　友　に　切　切　という　深（ふか）深（ふか）という

朋友切切偲偲、

友は真心を尽くし、

ahuu-ta deu-te de kek kek　se-mbi.

兄たち弟たちに　意にかなったと言う

兄弟怡怡。

兄弟には喜ばれる。

lak lak se-mbi.
うまくと言う
うまくいく。
hou hou se-re-ngge　jang　kai
堂　々　と言うのは張（人名？）か
張は堂々としている。
［語幹のあとで、文の前後関係がうまくつながらないときは、se-（と言う）を加える。澹台滅明（実在した儒学者の名前）と言う者がいた（という文のように）。］
tan tai miye ming se-re［と言う］　niyalma bi.
澹　台　滅　明　という　人　がいる
澹台滅明という人がいる。
aisi o-bu-ha se-me gungge se-ra-kuu［と言う］.
利益としたと言い　功績　と言わない
利之而不庸。
利益とみなし、必要とはみなさない。
［265］「急口（早口言葉？）」「縮脚（最後の語をあえて言わない方法）」という方法は文の形式を制限する。時に応じて不使用も可。
jabu-me mute-ra-kuu fuzi hendu-me o-mbi.
答えて　できない　孔子　言って　できる
「できない」と答えて言った。孔子は「できる」と言った。
急口の成語。
fuzi hendu-me ume.　uttu　ume.
孔子　言って　不要　このように　不要
孔子は「いや、する必要はない。」と言われた。
縮脚の成語である。
bi mute-ra-kuu se-re-ngge,
私　できない　と言うのは
「私はできない」と言うのは、
tere yargiyan-i mute-ra-kuu-ngge kai.
その　本当の　できないこと　だ
本当にできないからなのだ。
amura-ngge, sebjele-re-ngge de isi-ra-kuu.
好きなは　喜ぶ　こと　に　近づかない
好きなのと楽しむのは異なる。
［文の形式が限られている。］
（以下、文法説明と翻訳論が混在しているが、原文にあまり編集の手を加えない

ようにしたためと見られる。）
［266］（文法説明のため省略。語幹の形により語尾の形が変わる例）
［267］（文法説明のため省略。各種のこそあど言葉の例）
［268］人名・地名は昔の方式に従う。
［すべて満洲、モンゴル、新疆の地名は、定まった書き方がある。例えばハルハの斉斉爾里克　cicirlik,ザサク（？）の扎＊（ここにある字は賚の異字体？）特 jalait, 新疆の愛烏罕 ai uhan のように慣例に従う。ただ人名は状況がこれとは異なる。故人の数には限りがあるが、これから出て来る人の数は限りがない。もし中国語転写法に従うとすれば、しばしば不可能であることが多く、自らやり方を決めざるを得ない。例えば、文英 wen' ing,和容 hor ung,徳安 degan,徳凱 dek ai,成康 cengk ang,龍児 lung el,宝括 boug o 等のようになる。
［269］翻訳においてほかの言葉を使うこともできる。

han juwan ʃan
王　十　耳
王十耳。［満洲語である。］
han［川の名］　muke juwan iui［国名］　gurun tai ʃan［山名］　alin
漢　水　顓　臾　国　泰　山　山
漢。顓臾。泰山。
［音訳である。］

［270］（動詞および代名詞の不規則変化あるいは不規則形について）
［271］語をつなげると新しい意味になるものがある。
［holo うそ。huulha（賊）holo 盗賊となる。ulin nadan は財という意味であるが、 ulin なしで nadan だけでは七という意味である。bithe cagan は書籍という意味であるが、cagan だけで用いられることは極めてまれである。］
［272］（不規則変化をする動詞について）
［273］（不規則変化をする動詞について）
［274］（音韻法則）
［275］（音韻法則）
［276］（発音についての説明）
［277］（音韻法則）
［278］書くことが多くはなくても、いろいろな読み方ができる。少しの文字を記して楽しむことは難しい。専門家は頭を掻くが材料が足りない。良工は手を組んで、縄を準備するのも愚かなことだ。
［書くことは多いが語彙が少なく、材料も足りない。専門家もなすすべがない。kizi（？）kuturcehe は箕（み）を使う下僕であり、間違って aha（召使い）という語を使うのは好ましくない。monggon（のどくび）sampi（伸びた）とは首

を長くする、のどくびを伸ばして現すという意味である。meifen（うなじ）という語を誤って使ってはいけない。語を多く知っていても書くことが少なく、規則を知らなければ、それを補うすべがない。oci（…ならば）, ome（…であり）を知っていてもその使い方を知らないようなものだ。たぶん oci(…ならば）ojorakuu（いけない）ofi（であれば）自体を知らないのであろう。そうでなければ、使い方を知っていたはずである。もしもただ bici, bihe が「あれば」「あった」という意味であることを知っているなら、既にその使い方も知っているはずである。たぶん bici の前に bihe があれば「…であれば」の意味になり、-kuu があれば「…でない」の意味になることを知らないなら、空を見上げて茫然とするしかなく、これも使い方の問題である。多くの場合には二語を共に重んじる。すべての句が成句となるわけではなく、必ず集まるとそれぞれの語の意味にとらわれて全体の意味がわからなくなる。言葉の呼吸が合っていないと、適当とは言い難く、鹿を指して馬というようなものだ（故事成語。日本語の「馬鹿」はここから来たとも。）

［279］意外な妙案が出ることが自分の運に頼っているとすれば、その中で納得のいくものは師の説くところに頼っている。

［言葉は人を規則正しくすることができるが、人に技術を与えることはできない。まさに満洲語の初心者が満洲語の文章の切れ目を見分ける必要があるようなものである。語気があり、虚実あり、照応あり、あるときは力あり、あるときは力なく、既に起こったこと、まだ起こらないこと共にあり、読み、書き、翻訳し、長きにわたる技と力はもっぱら純粋であり、その妙は自ら生じたものであり、しかしながら言葉で表すことは容易ではない。例えば、その中の一つの言葉がどこにでも使われていることがわかっていながら、どこでも同じ意味ではないことがわからないなら、本当の意味というものは現れてこないことになる。］

cen heng ini［彼の］ejen be bele-he-bi,
陳　恒　彼の　　主君を殺したのだ
陳恒は自分の主君を殺した。
tenteke［そのような］niyalma bi-ci, tenteke dasan tukiye-bu-mbi.
そのような　　人　であればそのような政治　行われる
そういう人なら政治もそのようであろう。
bira-i ebergi　be yuyu-ci,
川の　こちら側を飢饉になるなら
川のこちら側は飢饉、
uba-i ［ここの］irgen be bira-i dergi ba-de guri-bu-me,
ここの　　民　を　川の　東側　場に　移らせて
ここの民を川の東側に移らせて、
tuba-i［むこう側の］jeku be bira-i ebergi　ba-de guri-bu-ha［た］.

むこうの　　米　を　川の　こちら側場に　移住させた
むこうの米を川のこちら側に移させた。
faksi-sa, ceni［彼らの］weilen be sain o-bu-ki　　se-mbihe-de,
職人たち彼らの　　仕事　を　よくならしめたいと言っていたのに
職人たちが仕事をうまくやりたいと望むなら
urunakuu nene-me ceni aguura be dacun o-bu-mbi.
必ず　　まず　彼らの道具を　鋭利なならしめる
必ずまず自分たちの道具をといでおく。
tere gurun de te-ci,
その　国　に住むなら
その国に住むなら
tere-i［その場所の］daifa-sa-i sai-ngge be uile-mbi,
そこの　　官吏たちのよいことを　仕える
そこの官吏たちはよい仕事をし、
tere-i taci-ha urse-i　gosingga-ngge de gucule-mbi.
そこの学んだ多くの人の仁義ある人　　に　友となる
そこで学んだ仁義ある人たちの友となる。
ama bi-sire de, tere-i［その］mujin be tuwa-mbi.
父　であるのにその　　志　　を　見る
父である人の志を見る。
amba-sa　saisa gisun de giru-me, yabun　be daba-bu-mbi.
大きい人たち賢人たち言葉に恥じてことを行うを越えさせる
君子はその言葉を恥じて行いを改める。

［二つの語は指すところなく、翻訳の際、それを捨てる。（翻訳の際、代名詞が不要になることがあるとの意か。）］

（用例の意図不明。）

（あとがき）

［280］雑談が許されたが、私は隠れた。先生は手を休めて私の饒舌を笑った。（この部分自体は徐氏の言葉であるはずがないのであるが、８音節×２の韻文になっている。編者が戯れに師の方法を真似たものか。）

［虚字の歌を収集して注を付けるのは、私の師である全輯五が本来望んでいることであった。彼はその歌のため、注の方法のため既にその規模を定めた。その先生は病を得て、未だに一字もできないのを残念に思った。かつてこう言った。「有能なようで私の志を成し遂げる者は、我が門下に学んで何かをなすのだ。」臨終の時に至って、もっぱらこのことの故に私に目を向けた。しかし学問の才の最も劣った私がどうしてこのことにあたることができようか。そうして一日中緊張して

いて、未だこれを忘れていない。自ら髪を乱して、王に仕え続け、時間があいたときに巻物を広げようとしたが、それもかなわず 30 年以上が過ぎてしまった。辛巳（かのとへび）の年（1881 年）の春、次の子季中及び数人の友人に渡して読ませた。悟り始めてこれに向かって学ぶところを大半は忘れてしまったが、それ以外の多くも確かではない。そこで昔の仕事をもう一度調べたが、跡形もなくなってしまった。そこで昔聞いたことを思い出し、この歌を編んだ。簡単に注を加え、窓の下で学んだにすぎない。それははっきりとはわからず、およそどれほどかを知らず、それでかえってこれを版木に刻むことを請い、未だかつて人に見せたことはない。このような仕事のため、人にあれこれ言いふらすことを避け、隠し、これを秘めておいた。]

［281］最後の人、あの人が述べて著述できた。そしてわが師が私に依頼したことに添うように努めた。（この部分も韻文になっている。）

［「（清文虚字）指南編」はすなわち、わが友廉浦旃公の友、厚田萬公が著したところのものである。ある日、萬公はこれを私に示して曰く、「これはまさに、次に上梓する本である。……」……（以下、清文虚字指南編について。）］

［282］もしも愚かにも欠けたところを補い、余分なところを削るなら、それこそが間違ったことであり、幸いを得ることがありえようか。（この部分も韻文になっている。）

［無学を開くことは難しい。特に大学者の場合はなおさらである。それは先入観にとらわれるからである。すなわち必要なことを言わないでおき、言ったことは……（この部分、原文破損のため判読不能）でないようである。まして、あとから悟ることは難しい。私は怠慢のあまり、未だに正すところに至っていない。本当に失うところがあるのはやむを得ないのではないかと恐れている。もしも無学な同志の者が大いに加筆したり削ったりすれば、それはまさに私の誤りであって、正しいところによって無知なところを直していただきたい。あとに続く学者たちはとても幸いである。私もまた深く栄光を賜るに違いない。]

【解説】

字法挙一歌の翻訳論のナイダとの比較

徐氏は当時良く知られていたと思われる繙清論という翻訳論に従って翻訳論を説く。すなわち

正統的方法	原文寄りの訳（直訳）
変則的方法	言葉を加える、言葉を減らす、意味をとって訳す、倒置する

しかし彼は繙清論が正統的方法とよぶものはできるだけ避け、繙清論が変則的方法とよぶものをできるだけとるべきだと説くことにより、繙清論とは大きく異なる翻訳論を展開する。技法の面に注目すれば、原文寄りの訳を避ける、語を加

える、意味をとって訳す、翻訳口調を避ける［231］等、彼の方法は極めてナイダの方法と類似している。

次に、なぜこのような方法をとるのかということであるが、彼の説くところによれば、原文において非常に重要なのはその意味である。（彼はこの意味を本地風光という特殊な術語でよんでいる。これは、ナイダが dynamic equivalence という語を用いて彼の翻訳論の独自性を表そうとしたのと似ている。なお、ここでは、本地風光は「本来の意味」と訳した。この語は［220］［221］［230］［279］に出てくる。）この意味をつかめと彼は説く。［221］［238］そしてその意味を訳すべきである。それは、逐語訳では意味が伝わらないからである。［238］この方法論の裏づけも、ナイダとよく似ている。彼はナイダのように多くのスペースをとって理論を展開してはいないが、彼の説くところはわかりやすく、また我々の納得のいくものである。

挙一歌はまた語の意味についても触れ、語は多義でありうること、また語は状況により使い分けられることを述べている。［221］～［230］これはナイダの翻訳論とも対応するようであるが、細かいところについては検討が必要である。

しかしこの基本的なところ以外の多くの部分はかなりわかりにくいものとなっている。そのような部分も解き明かされていかなければならないであろう。

なお、ナイダの翻訳論は不十分ながら、文レベルだけではなく、テキストレベルまで（文と文との関係、テキストの構造等）及んでいるのであるが、挙一歌の翻訳論も接続語について［261］、また起承転結あるいは我々にはなじみがないのであるが、理弊功効といったテキストの構成まで扱っている。［257］

最後に挙一歌の翻訳論と他の翻訳論との関係であるが、すでに述べたもののほか、彼は翻訳指南や翻訳教本も参考にした可能性がある。（これらの翻訳論については、清代満蒙詞典研究を参照のこと。これらの文献は現在のところ、所蔵する中国の図書館と直接交渉しない限り、見ることは難しいであろう。ただし彼の翻訳論はそれ以後の漢民族の翻訳論に影響を与えることはほとんどなかった。満洲語が使われなくなり、清朝滅亡後、満洲語の翻訳論はほとんど参考にされなかったものと思われる。

挙一歌はとりあえず完成後、なかなか出版されなかったとのことであるが、そのことを考慮に入れ、この翻訳論のできた年を 1845～1850 年ごろとしても、ナイダの翻訳論よりも 100 年以上前ということになる。満洲語の翻訳論は欧米の翻訳論を先取りするような内容のものであったことが知られる。この翻訳論がしかるべき評価を得ていくことを期待したい。

なお、ナイダの理論に対する反対論を、挙一歌の翻訳論はかわし得るのではないかとも考えられるので、次にそれについて見てみたい。

ナイダの理論の反対論の一つとして、equivalence というものが本当に存在す

るのかという議論がある。これについては、とりあえず、挙一歌ではそのような語は用いられていないと答えることができよう。しかし、挙一歌では本地風光（本来の意味）という言葉が出てくる。これに対して、言葉で表されていながら、言葉とは無関係な意味がありうるのかどうかという反論が起こりうるであろう。確かに例えば、「共通性」とか「敵対意識」といった抽象名詞も、その意味は何か言葉に支えられているところがあるのではないかという気がする。

次にナイダへの反論として、ナイダの理論は布教を目的としたものではないかというものがある。これについては、挙一歌はそのような意図とは無縁であると答えることができる。しかし、挙一歌も、国家を盤石なものにする、漢民族と満洲民族の友好関係をはかる、あるいは懐柔政策をとるといった意図はあるに違いない（それがどのようなものであるかは、改めて検討が必要であろう）。翻訳という営み自体が、全く意図なくしてなされるということはありえない。

おわりに

曲がりなりにも日本語の翻訳ができたのであるが、次の仕事はこの翻訳論を解釈していくことであろう。訳したということは必ずしも意味がわかったということではない。もちろん訳文の検討、改善も必要であると思うが、解釈の作業の中でも訳文の検討は進められていくに違いない。

解読にあたって中国語と満洲語の知識があることは好ましいことであると思うが、日本語訳をたよりに解読していく試みも、必ずしも不毛であるとして退けられるものではないであろう。

この文献の半分以上は満洲語の文法、語法の説明なのであるが、満洲語文法記述と翻訳論の関係はどうなっているのか、文法と翻訳論の間に有機的な関係が見られないか、文法説明が翻訳方法に近いものになっていないか等は、研究されるべき課題であろう。

この翻訳論を読んで、まず気が付くのは、扱っているテーマの豊富さである。全体的に見ると、以下のようなテーマが扱われていることがわかる。

いわゆる意訳と直訳、類義語、敬称、国あるいは民族による立場の違い、訳文の追加説明、簡素化、正確さ、文法分析、全体の連続性、論理のつながり、引用、いくつかの修辞法、固有名詞（地名・人名）の表記法、熟語・慣用句、翻訳の学問的アプローチの可能性・不可能性等々。

これを見ると、当時優れた翻訳の教師がいて、立派な翻訳訓練コースのようなものがあったのではないかと思わされる。

しかし個々のテーマについて著者はこの文献の中では必ずしも多くを語らない。それはこの文献が学習書あるいは教科書として用いられ、すべてを述べるのではなく、学習者にも自主的に考えさせようとしたからではないかと思われる。要点

が韻文で書かれているのもこの書の教育的配慮からに違いない。本文［228］と［229］に読者あるいは学習者への問いかけがあることも注目される。この文献は明らかに、研究者を対象とした翻訳論ではなく、学習書、教科書として見るべきであろう。

私自身、中国語の専門家ではないため、さらによい訳が出ることを期待したい。

そしてまた、この書についてのさらなる研究がなされていくことを期待したい。

もちろん私自身も、さらに研究を深めていきたいと思っている。誤訳の指摘も研究の進展のため甘んじて受けたい。そしてもし結果が出れば、さらに公にしていきたい。

――

著者：北村彰秀（KITAMURA Akihide）

主な著書/

東洋の翻訳論

続　東洋の翻訳論

東洋の翻訳論Ⅲ

聖書を訳して――モンゴル語聖書翻訳にかかわって

The Discourse (Text) Grammar of Modern Mongolian

いずれも Thrusteppes 刊。

(https://thrusteppes.jimdofree.com/)

連絡先：a_kitamura07@yahoo.co.jp

……

【参考文献】

吴雪娟著（2005）『論満文翻訳観』「満語研究」2005 年第 2 期

吴雪娟著（2006）『満文翻訳研究』民族出版社

嵩洛峰他編（2018）『清文接字・字法挙一歌』北京大学出版社

ジェレミー・マンデイ著、鳥飼玖美子監訳『翻訳学入門』みすず書房

E. ナイダ他著、沢登春仁他訳（1973）『翻訳―理論と実際』研究社

Eugene Nida et al (1969): *The Theory and Practice of Translation.* Brill, Leiden.

春花著（2008）『清代満蒙文詞典研究』（中国蒙古学文庫）遼寧民族出版社

馬祖毅等著（2006）『中国翻訳通史古代部分』湖北教育出版社

Robert Neather (ed.) (2017): *An Anthology of Chinese Discourse on Translation Vol. 2: From the Late Twelfth Century to 1800.* Routledge.

徐隆泰著

北村彰秀訳

満洲語翻訳論――字法挙一歌

第２版

2023 年４月２９日発行
Thrusteppes
©Akihide Kitamura 2023